

科学の概念の革命とは、何がどう変わるのか？

Greatchain
2019/11/13

Science Uprising (科学の蜂起または内乱)と呼ばれる運動が今、Intelligent Design の唱道者たちを中核として起こり、一気に拡大しつつある事実については、ここで何度も言及した。そのネット上に現れるユーチューブの多さだけでも、それが学者によって、確実に認証されつつあることがわかる。これはアメリカの政治の動きと、明らかに並行して起こっている。アメリカの（そして世界の）政治の争いは、その根において、神とサタンの闘争である。科学の世界においても、その世界認識の方法に起こっている革命は、神とサタンの闘争だと言ってよい。どちらも、サタン側である体制派が衰退し滅びていくことは、目に見えている。その決着は時間の問題である。途中で形勢が変わって、やはりサタン側が正しかった、などということが起こることは絶対にない。

ID 論者の一人で、*Darwin on Trial* (裁かれるダーウィン) の著者 Phillip Johnson がこの 11 月に亡くなった。ID に対するダーウィン側の、理不尽な法廷闘争における、この人の不屈の戦いが、大きな称賛と共に紹介されている。その闘争の経緯がどんなものであったか——彼の著書に対する有名なダーウィニスト Stephen Jay Gould の書評と、それを反論する学者の意見はこんな風だった：

(*Darwin on Trial* は)「非常に悪い (a very bad) 本、間違いだらけで、議論がおかし
く、虚偽の規準に基づいており、どうしようもなくひどい本だ (abysmally written)」

不幸なことに、これを引用したこの記事は、同じくらい著名な科学者たちが、勇敢にも、ジョンソンの学識は模範的なものだと言っていることを省いている。例えば、シカゴ大学の古生物学者 David Raup は、グールドとジョンソンの個人的な討論を目標としており、後にこう書いた：——「ジョンソンの著書は非常に優れた学識によるものだ。しかし、これはもちろん、広く否定されてきた。彼の間違いを指摘することはできない。彼は自分の宿題を果たした。そして彼は、進化生物学を 99 パーセント理解している。」

フィリップ・ジョンソンの仕事は、正当かつ科学的で、アメリカ全土の科学教育に深遠な影響を及ぼした。それが真理だった——たとえ彼の永続する遺産が、必ずしも正しく認められないとしても。

スティーヴン・J・グールドは、ダーウィン理論のいわば最高権威者である。その人が、フィリップ・ジョンソンは間違っていると言え、それが学界ではまかり通る。しかし、この書評のオタオタした言葉遣いを見るがよい。自信のある者は、決してこんな言い方はしない。これは厳しい書評などでなく、自らの醜態をさらすものである。しかし、人がそれを正直に言えば、科学者商売が続けられないので、科学者共同体はこれが正しいことにした。そして、彼らはいみじくも、最悪の犯罪者にして、国家最高の人物とつながりをもつ、ジェフリー・エプステーンによって牛耳られてきた。我が国の知識人もそれに従っている。<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/190928.pdf>

そして注目すべきは、政治の世界で起こっていることも、パターンが同じだということである。トランプや彼の支持者を滅ぼそうとして画策する者たちは、事実は知れ渡っていて、単に醜態をさらしているに過ぎない。しかしそれをはっきり言えば、わが身が危険なので、反トランプ側に付くものが増えている。我々は腐った世界に生きている。これも腐ったとは言えないので、あたかもこれが「常識」で、これに異を唱える者が狂っているかのように扱われる。

実はこれが現在、神学上の問題として起こっているのだが、ほとんどの人は（特に日本人は）これを知らないでいる。我々の世界は、政治にせよ、文化や教育や科学にせよ、神の創ったものを破壊しようとする、サタンによって支配されているが、そのやり方が巧妙で隠微であるために、わずかの人々を除いて、大多数の人々は、これが当たり前だと思っている。世界の大多数（特に日本人）は、これまでの安易な、唯物論的怠け者教育のために、科学教育さえやっておれば人間は進歩し、その科学には、価値も意味も目的もないのが当たり前だと思っている。そしてインテリジェント・デザインという、唯物論や無神論の間違いを証明する科学理論が登場したとき、この世界のあり方も、自分自身の生き方も、ひっくり返されたということを知らないでいる。——どれくらい、ひっくり返されたのだろうか？

ちょうど今、私の家の小さな庭に、皇帝ダリアという背の高いダリアが、ほぼ満開になっている。これは人間の背丈の2倍から3倍になる。したがって、天辺に咲くその花は、下を向いて咲いている。私はこの事実を、自然界の「デザイン」とか「インテリジェンス」という言葉を聞く前に、誰かから聞いた。花は、人間の目の高さに合わせて咲き、足元に咲く花で下を向くものはなく、目より上の花で、上を向いて咲く花はない。（これはあくま

で美的鑑賞の問題であって、例えば、ユリは背が低いが下を向いて咲く。) 私はこれを聞いたときハッとした。そしてその感動は今も続いている。

そのときまだ「デザイン」という言葉を知らなかったが、今の知識から考えると、これは明らかに、超知能による、人間を中心としたデザインである。これは「宇宙的微調整」Cosmic Fine-Tuning として知られる、驚くべき宇宙的事実の1つである。すなわち、この世界(宇宙)は、宇宙創造の初めから、人間と人間が住む環境を作り出すように、あらゆる物理的数値が微調整されていた。それは重力常数などだけでなく、例えば、水の持つ多くの性質が少しでも数値的に変えられたら、人間は生きられない。ただ生きるためだけでなく、人間が宇宙の事実を発見する(できる)ように、配慮されていた。それを細かく解説する本の1つが、Guillermo Gonzalez (ギエルモ・ゴンザレス他) の *Privileged Planet* (特権的惑星) という本であり、その副題は「いかに宇宙における我々の場所が、発見のためにデザインされているか」となっている。因みに、この著者も本もビデオも迫害の対象となった。アインシュタインの有名な言葉に、「この宇宙について最も理解できないことは、それが理解できることだ」というのがあるが、これも、その不思議なデザインから考えるべきである。

私が何を言いたいのかお分かりであろう。なぜ科学の革命と言わねばならないのか？ 我々は無神論・唯物論による徹底的な教育を受けきたために、「デザイン」などという概念は思いもよらなかった。それは自然科学とは最も相容れない概念だった。それが ID によって、実は、自然界のすべてがデザインされたもの、目的と意図をもって創られたものであるという考え方に、徐々に、しかし確実に変わっていった。これは天と地がひっくり返ること、科学的と非科学的がひっくり返ることである。したがって、敵対と闘争を世界の原理とする教育から、調和と愛を世界の原則とする教育に、転換しなければならなくなった。これは革命である。この正反対の原理の根本は何か？ それはサタンと神との対立である。我々の世界解釈の根本には、この2つの原理しかない。中間案も折衷案もない。

ひとつ、面白くわかり易い例を話そう。たぶん、30年も前のこと、元プロ野球選手でタレントになった人が、テレビの園芸番組を担当していた。彼は何かの拍子に「花は人間のために咲いてくれている」と言いそうになった。すると彼は大慌てで「そんなことはありませんよ。花は人間のために咲いているわけではありませんよ」と修正した。おそらく彼は、自分が、ダーウィンの原理を知らないような「馬鹿」ではないと、念を押したかったのだろう。実は彼の直観の方が正しかった。花は人間のために咲いており、我々の目の高さまで考慮してくれている。

この世界解釈の転換と、我々の意識の持ち方の変化が、どれほどの深い革命的結果をもたらすだろうか？ 文字通りそれは計り知れない。